



Title	松花堂草庵の意匠：竈・茶室・庭園の關係を中心に
Author(s)	佐藤, 悦子
Citation	デザイン理論. 2021, 78, p. 40-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83332
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

松花堂草庵の意匠

竈・茶室・庭園の関係を中心に

佐藤 悦子 京都工芸繊維大学大学院 博士後期課程

はじめに

三代将軍家光（在職 1623-1651）の時代に、京都の南東に位置している石清水八幡宮護国寺の一坊、瀧本坊の住職であった松花堂昭乗（1584-1639）は 1637（寛永 14）年、瀧本坊の住職を乗淳に譲り、瀧本坊の南東に位置する泉坊に移り草庵を創建、阿闍梨としての最晩年 2 年間で終の棲家とした。

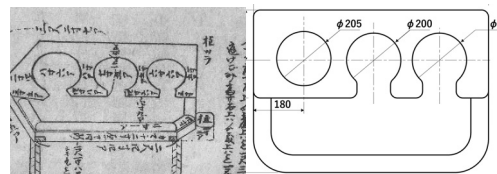
明治の廃仏毀釈の折には石清水八幡宮護国寺の坊の全てが取り壊された中で、泉坊書院と草庵だけは移築されて残ったのである。

昭乗は江戸時代の三筆として名高く、絵や茶道にも造詣が深く、彼の芸術家としての美意識は生活空間に大きく影響したと考えられる。昭乗は 17 歳の折に瀧本坊に入り 56 歳で亡くなるが、37 年間に瀧本坊で暮らし、その後の 2 年間に泉坊と草庵で暮らした。

本研究の目的は、松花堂草庵に設えた竈・茶室・庭園の関係を中心に分析し、彼の空間設計思想の特徴、由来を明らかにするとともに、草庵の設計思想と現代の空間設計理念との共通点を探ることで、昭乗が持っていた創造力と先見性を明らかにすることである。

竈

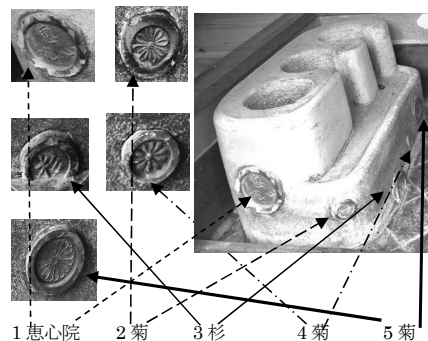
文久時代の竈の火口と現在の竈の火口の形状は異なり、また、文久時代の竈には書かれていない 5 つの丸瓦が配置よく嵌め込まれている。竈の正面と側面をつなげて観察すると、大小の丸瓦が緩やかな円弧に添って配置されていることがわかる。



文久時代の草庵竈

2021 年の竈の製図

また、竈の側面底辺 582 mm：正面底辺 840 mm がほぼ $1:\sqrt{2}$ となった。この竈の美的特徴の本質は、この整った比率と装飾的リズムであると考えられる。



5 つの丸瓦は以下である。

- * 「恵心院」（京都府宇治市宇治山田 67，創建 821 年，真言密教）の刻印瓦 1 枚
- * 「菊文」の丸瓦 3 枚
- * 「杉」の刻印丸瓦 1 枚（石清水八幡宮護国寺の杉本坊の物と推定）

この内、「杉」の丸瓦は裁断されて瓦片を敷き詰めた土間に斜めに埋め込まれ、あたかも土間から竈が杉という生命樹と共に生えてきたように見える。つまり、竈に対して丸瓦が自然界の要素とし

て命を吹き込む作用を果たしているとも言える。裏付けとなる証拠はないが、昭乗が敢えて「杉」という要素を土間と一体化させていることを記しておきたい。自然回帰への志向は、最晩年の昭乗が目指した空間芸術の特徴ではないだろうか。

草庵の竈は「竈土構」の様式を取っている。「竈土構」とは、炉を切らず、湯を沸かしたり、軽い食事等の用意をする為に設置した竈を使って茶事を行う様式である。庵として創建された松花堂草庵に「竈土構」を取り入れることで、日常生活にも茶事にも使用できる柔軟な空間を創ろうとしたと考えられる。

茶室

戦国時代から安定した世に移り文化的な環境が整ってくると、その文化を象徴するように茶の湯が、朝廷や幕府、京都上層町衆の文化交流の手立てとして発展してくる。

昭乗は瀧本坊に茶立て所（茶室）、閑雲軒茶室、泉坊には松花堂草庵茶室を持っていた。閑雲軒茶室では1631（寛永8）年から1633（寛永10）年に昭乗は頻りに茶会を開いていて「茶会記」が残っているが、松花堂草庵茶室での記録はない。

草庵茶室には出入口が三ヶ所あり、南正面玄関を出入口にすると日常の生活空間となる。西側蹴り口を出入口にすると非日常の茶室空間になる。東側縁側は庭を觀賞するためにあけられた出入口になり、2畳の部屋は居間や茶室、寝室にもなる。北西にある半畳の部屋には水屋があり物置にも利用可能である。全体として多目的に使用できるよう無駄のない設計になっている。

庭園

昭乗が創建した当時の庭は石清水八幡宮護国寺の男山の中腹に位置しており「都林泉名勝図絵巻五 一乾」に「数寄屋待合ホ風流して庭中より宇治川 朝日山 小倉池 伏見津田 黄檗 木幡里 城山 鮮やかに見えて無双の妙景なり。」とあ

り、庭に出ると上記のような景色を望めたと推測できる。現在は京都府八幡市の松花堂美術館内にあり、宇治川や朝日山などは見ることはできない。立地の相違はあるが庭のスケールの大きさや泉坊と草庵の位置関係は当時とほぼ変わらず移築されており、草庵を中心に回遊式庭園として造られている。



1801（寛政13）年に描かれた松花堂草庵周辺の絵地図と松花堂草庵。「都林泉名勝図絵巻五 一乾」

おわりに

昭乗の人間の魅力や芸術性の高さは宗教（真言密教）、書、絵画、茶道、建築、作庭と幅広い分野で深く研究がなされているが、「竈」を中心とした「茶室」や「庭」を切り口にした研究は未聞である。

生活空間で最重要な火の使用と調理は様々に進化発展してきた。この調理の源であり必須であった竈を、日常と非日常の空間を調和させ、草庵の個性として表現することが、昭乗の空間総合芸術の集大成であったと考えられる。「竈土構」の様式を取り入れることにより、招く側と招かれる側の物理的・心理的双方の距離を緩和したとも言える。

高齢化、核家族化が進む現代生活の中で、昭乗が目指した柔軟な空間設計手法が活かせるのではないだろうか。そのためには、昭乗が追求した人と人、人と空間要素の距離感の取り方の手法をどれほど学べるかが今後の課題である。